

市指定 重要文化財（石造美術）

せきぞうぶつがん いたび
石造仏龕（板碑）

員数：1基／所在地：笠岡市絵師字山ノ神と宮ノ前の境／管理者：絵師町内会
指定年月日：平成22年8月5日

絵師の薬師寺横にある墓地の入口付近、山道脇に立つ、花崗岩製の仏龕（板碑）である。
種子や名号等の文字ではなく、浮き彫りによる一体の仏像のみを中央に安置している点に鑑みて、「石造仏龕」という名称で指定しているが、このような石造物を「板碑」と呼ぶこともある。

正面のみ整形された不定型方柱状の石造物である。地上高96cm、最大幅25.5cm、最厚22cm。

山形の頂部は自然形状を生かして不定形に突出させており、その下に2段の切れ込みと額部が表現される。身部は1段窪ませて、光背状に表現された縦長橈円の彫り込みの中に如来の坐像を浮き彫りにする。下半身と蓮華座は線刻風に比較的浅めにして、立体的な表現がなされている。蓮座の下側は無紋である。

銘文等はないものの、室町時代後期に遡る雅味を湛えており、市内でも数少ない仏龕（板碑）の遺例として貴重である。



県指定 重要文化財（彫刻）

29 木造如来立像 (32 ページ掲載。市指定から県指定になりました。)

員数：1躯／所在地：笠岡市篠坂 三宝院／所有者：三宝院

指定年月日：平成17年3月11日

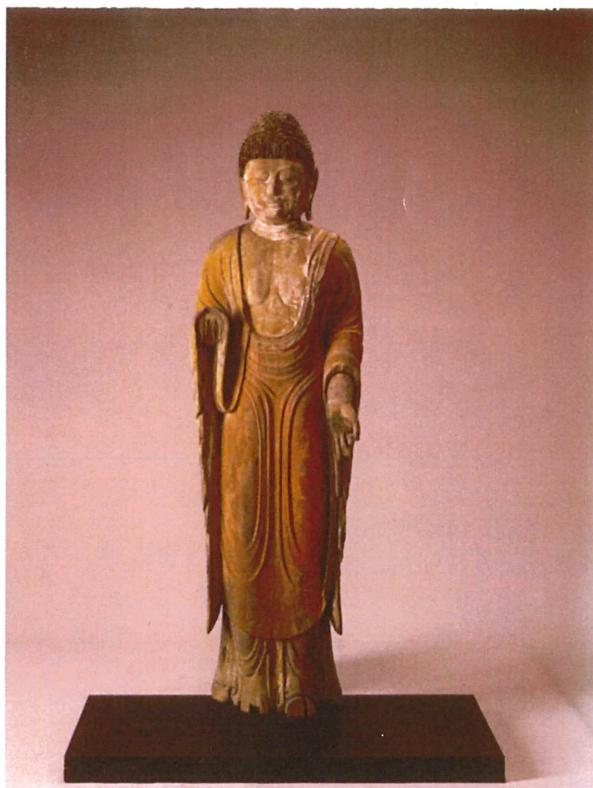
平安時代に製作されたと考えられる。檜材、一木造で、像高 135 cm。

笠岡市の北西端に位置し、広島県境に接する篠坂・押撫地区は、平安時代から鎌倉時代にかけて、泉福寺大防を中心とした十二の寺坊があり、一大修行道場として栄えていた。その後衰微したが、戦国期に三院が再興、さらに昭和 14 年に三宝院として統合され、現在に至っている。

この像は、十二坊の中心である本堂の本尊であったといわれ、一木造で内割りはなく彫眼が施されている。現在は全身に朱色等が施されているが、一部に漆箔が残存し、その下にも古い彩色が認められることから、最初彩色像であったものを後世漆箔像に改変し、再び彩色像に直したものと考えられる。また、右手先と両足先を欠損するが、いわゆる來迎印を結ぶ左手先も袖口部のはぎつけ面に齟齬があり、明らかに後補である。本来は薬壺を持つ薬師如来であった可能性もあるが、いずれにしろ漆箔修理時に、阿弥陀如来として改変されたのであろう。

古い様式を踏襲しながらも、穏やかな面貌表現や厚みの薄い身体感、鎧の浅い衣文など全体に温和な造作で、11世紀中頃の製作と推定される。

現在は、岡山県立博物館に寄託されている。



市指定 重要文化財（彫刻）

もくぞうめいかいぐんぞう
木造冥界群像

員数：15躯及び2口（一具）／所在地：笠岡市笠岡 吉祥院／所有者：吉祥院

指定年月日：平成22年8月5日

焰魔王（閻魔王）像を中心とする十王像10躯、司命像・司録像、奪衣婆像、鬼卒像2躯、人頭幢（壇茶幢）・鏡台で構成される一大群像である。

十王像、司命像・司録像・奪衣婆像はヒノキ材、寄木造、水晶製玉眼。一部の諸尊、台座や畳座裏面に墨書銘があつて、享保9年（1724）から11年（1726）に至る3カ年の間に、京都仏師・中橋運平良次によって製作されたことが分かる。

鬼卒像はカヤ材、寄木造で目は彫眼。上記の一群とは構造・作風が異なっているものの、それらと大きく隔たらない時期に、笠岡周辺で製作・付加されたものと思われる。人頭幢（壇茶幢）・鏡台はヒノキ材、寄木造。作風から、鬼卒と同時期のものと推定される。

年代・作者ともに明らかな中央の基準作例であり、これに鬼卒像や道具類をも追加した冥界群像の完備遺例として貴重である。



木造冥界群像



焰魔王（閻魔王）



鬼卒（吽） 奪衣婆 十王



人頭幢（壇茶幢）・司録



十王 鬼卒（阿）

市指定 重要無形民俗文化財

金浦のおしぇらんご

伝 承 地 : 笠岡市金浦／保存団体 : 金浦ひったか・おしぇらんご保存会

指定年月日 : 平成17年3月24日

金浦湾で行われる伝統行事。源氏方（白）と平家方（紅）に見立てた2隻の和船に6人ずつ乗船し、競漕する行事。夜のひったかと一体の行事であるといわれる。

かつて金浦は漁村であった。競技船にはその年の新造船が使用され、勝てば1年間豊漁といわれたため船主は勝敗にこだわり、喧嘩も珍しくなかったという。

もとは旧暦5月5日、端午の節句の行事であったが、現在ではそれに近い土曜日の夜にひったかを、翌日曜日の昼の満潮時におしぇらんごを挙行する。

ひったかと同じく源平合戦を起源とするといわれるが、古記録は確認されていない。

漁業者の減少から昭和36年にいったん中止となったが、廃絶を惜しむ地元の努力により昭和62年に復活し、以後盛大に挙行している。大人用は六尋船だが、子供用の四尋船もあり、保存会員の指導を受けた地元小中学校の生徒がこれに乗って行事に参加している。



国 登録有形文化財（建造物）

真鍋家住宅主屋ほか

員数：5棟／所在地：笠岡市真鍋島／所有者：個人

登録年月日：平成18年3月27日

真鍋家住宅は、明治から大正にかけて建てられた5棟の建物によって構成されており、保存状態もよい。真鍋氏は、近世からの歴史をたどれる由緒ある家系で、島の旧家である。

●真鍋家住宅主屋

明治3年（1870）の建築で、棟札が残る。屋根は桟瓦葺で、東側に土間を設け、西側に書院を備えた座敷がある。島の民家史を知るうえで貴重な住宅である。

●真鍋家住宅旧郵便局舎

大正6年（1917）建築。主屋の北側にある。島内では数少ない洋風意匠で、近代化の足跡を伝える。大正7年から昭和37年まで、郵便局として使用されていた。現在でも西側路地に面して、玄関の切妻造屋根の一部が顔を出しているのはその名残。

●真鍋家住宅乾蔵

明治26年（1893）建築。旧郵便局舎の北側にあり、現在の真鍋島郵便局に隣接している。土蔵造2階建。外壁は漆喰塗で腰を海鼠壁とする。外観は近年改修されたが、旧状をよく踏襲し、伝統的な街路景観を形成している。

●真鍋家住宅倉庫及び納屋

明治7年（1874）建築。敷地の南隅にある。2階建の倉庫と平屋建の納屋が並んでいる。桟瓦葺の土蔵造。外壁は漆喰塗で腰を縦板で覆う。倉庫には麦年貢、納屋は薪などを収納していた。

●真鍋家住宅表門

明治前期の建築。中央を門口とし、東脇に潜戸を設け、正面の壁には色土を用いる。旧家に相応しい表構えとなっている。



真鍋家住宅主屋



旧郵便局舎（手前）と乾蔵（奥）

きたぎしま
北木島の石工用具

点数：199点／所在地：笠岡市北木島／所有者：笠岡市
登録年月日：平成26年2月24日

笠岡市北木島で産出される花崗岩の採石や加工などに使用された用具。明治時代から昭和後期にかけて使用されたものである。笠岡市立北木中学校内の北木石記念室に常設展示されている。

北木島の花崗岩は「北木石」と呼ばれ、石質が硬く吸水率が低いため経年変化しにくく、また光沢があり加工も容易という特徴があるため、明治以降、日本銀行本店、靖国神社大鳥居、京都五条大橋、薬師寺西塔など多くの建造物に使用され続けている。

資料は、丁場（採石場）で使用した「採石用具」、加工場で使用した「加工用具」、道具の手入れに使った「鍛冶用具」で構成されている。

特に採石用具が充実しており、丁場造成から始まって、石を割る「矢割り」、石を運び出す運搬など、各工程で使われた用具がそろっている。主な矢割り用具として、人力で打ち込むくさび「大矢」、「中矢」、「豆矢」、ハンマーとして使う「ゲンノウ」などのほか、昭和27年（1952）以後に登場した削岩機やチッピングハンマーもある。

明治以来の伝統的な道具と、昭和の機械化された道具の双方が収集されていることが特徴で、わが国の石工技術や採石業の変遷を考えるうえで注目すべき資料群といえる。



「北木島の石工用具」の一部